第 197 回森で遊ぶ会（富士山こどもの国）実施報告書

1. 実施日時：令和 5 年 6 月26日（8:00～17:00）

2. 実施場所：富士山こどもの国

3. 参加インストラクター会員

担当：青野、佐野

アシスタント会員：越智、大石、小久保、小嶋、小長井、喜多、杉山、高橋、矢下

4. 一般会員の参加： 合計26名

5. 実施状況

富士山こどもの国の園内では、富士山麓に自生している多数の樹木や草花を観察できることを知り、今回、初めて企画した。しかし、草花の詳細な情報が入手できず、開催日にどのような草花が開花しているかわからず苦慮した。

6月上旬に訪れた際に観察できたベニバナヤマシャクヤクやクリンソウ、サンショウバラの花は開催日には散ってしまい、少し寂しい観察会となった。しかし、サワトラノオは開花期を迎え、小さな白い花を咲かせていた。本種は自生地が限られ観察機会も少ないので、じっくりと観察してもらった。

午前中は主に「花の谷」で草花を観察、昼食は草原の家の前で摂り、午後は水の国へ向かって歩き、歩道沿いの樹木を観察した。歩道沿いにも多くの種類の樹木があり、観察するにはちょうどよかった。時折、雲の切れ間から富士山を眺めることができた。梅雨時期で天気を心配したが、雨にも降られず、じっくりと楽しい観察会を開催することができた。開花中の草花は少なく残念であったが、あまり観る機会のない結実期の状態を観察することができたことは、ある意味ではよかったのではないかと思う。

本観察会の開催に際しては、富士山こどもの国の皆様の協力を頂き、快く迎えて頂いたことに感謝致します。ありがとうございました。

今回は4班編成で観察会を実施したので、その概要を以下、班毎に報告する。

＜1 班＞（担当：小久保、越智、小長井）

常連のベテランが多い女性 7 人の斑を案内した。

梅雨時期としては天気に恵まれ、午後には雲の間から富士の山頂も望むことができた。 標高も高いので暑過ぎず、また遊歩道の高低差も少ないので快適な散策になったのではないだろうか。

今回のメインとなる「花の谷」では、サンショウバラ、クリンソウやベニバナヤマシャクヤクなど花の時期が既に終わっていたり、クサレダマやコオニユリなど花がまだ咲いていない種も多く、タイミング的には一寸残念な状態であった。そんな中で、花を確認できたのは、シモツケ、ヤマオダマキ、ノアザミ、オカトラノオ、それにサワトラノオ（総状花序の一部）程度であった。 そこで代わりに予めタブレットにダウンロードしておいたそれぞれの花の画像を示し、本来見てもらいたかったものをイメージしていただいた。 こうして一応花を確認できたのはよかったが、皆さん実物を見られなかったことは残念だったに違いない。

「花の谷」では草花の観察が中心になったが、園内の遊歩道沿いには数多くの樹木があるので午後はそれらを観察しながら園内を巡った。 花を確認できたのは、ヤマボウシ、ウツギ、シモツケ、イボタノキ、ハコネウツギ、ウメモドキ、ネジキなどだ。 ウメモドキは雄株と雌株が別の場所にあり、それぞれ花も咲いていた。 そこで各々拡大レンズで見てもらい、雄花と雌花の違い（雌花の目立つ子房等）を確認してもらった。 ヤマボウシでは花弁のように見えるのは総苞片であることを話したが、皆さんベテランなので既にご存知の様子だった。 そこで花の裏側を見てもらい、そ

こには萼がない事を示して改めて花弁ではないと納得していただいた。果実は甘くておいしいこと、名前の由来は、丸い花の部分を僧兵の頭、総苞片を白頭巾に見立てた説があることも説明した。またヤマボウシの葉裏の葉脈腋には特徴的な褐色毛叢があるが、これを拡大レンズで見ると黒々とした毛の塊が見えるので、皆さんから驚きの声が上がった。

ハコネウツギでは、よく似たニシキウツギとの識別点を花や葉の違いで説明した。また花の色が白から赤に変わるのは、ハチなどに花の熟度を知らせるサインとなり、ハチは花の色（白/赤）を学習して効率的に蜜を吸い、花はハチに未受粉の花を集中的に巡回させる相利関係が成立していることを説明した。花の咲いていない樹木のうちやや見分けにくいと思われるものについては、「さあ、これは何でしょう？」と、クイズ形式で樹木名を回答してもらった。皆さんベテランだけあって正解もあったが、中には答えられないものもあってまた一つ新たに勉強していただいた。やはり花や実があればわかりやすいが、葉だけで名前を判別するのは難しいようだった。

観察の常道として五感で体験していただくものとしては、例えばヤマグワの黒い実（口内を真っ赤にしながら「あっ、美味しい！」）、ゴマギの葉の特有の匂い（「ホントにゴマの香り！」）などが印象深かったようだ。またオオバヤシャブシでは、その葉が秋に紅葉せず緑葉のまま落葉する理由を解説した。紅葉は植物に不可欠な窒素回収のため葉緑素が分解されて起こること、一方ヤシャブシでは根粒菌との共生により根から十分な窒素が吸収できるので、この分解が不要なことがその理由、と説明した。併せ、何故紅葉が赤い色になるのかその仕組みから解説も試みた。しかし、やや専門的になったので分かっていただけただろうか？

ともあれ全体的にはインストラクターの説明を熱心に聞いていただけ、またメモや写真を撮っている姿も見られたので、皆さんには満足していただけたのではないだろうか。（小長井　記）

<2 班>（担当：小嶋、大石、青野）

2 班は清水からのメンバー7 名のグループだった。

入口から花の谷へと直行したが、途中の草むらでワラビ取りに夢中になる人が何人かいた。花の谷では最初に鹿よけのネットをあげて湿地に入り、絶滅危惧種のサワトラノオ数株を観察してもらった。絶滅危惧種といわれても、虎の尾のイメージの長い尾ではないので、皆さんちょっと不満そうに観察してした。その後ろ側には盆花のミソハギが一面に生えていた。ネットを出てクリンソウの種を見ながら通路まで登りサルナシの小さな実を切って、キーウイの仲間だということを見てもらった。そのほかの草地の中の植物は、花もないことからあまり興味なかろうとあっさりと通り抜けてしまった。結局、シモツケの花とキリンソウ、ワレモコウは葉のみの観察だった。そこからは周遊道をクワの実をつまんだり、遠くのヤマボウシの花を見たりしながら登り、意外と早く草原の家についてしまったので、パオ集落の横を抜けて標高 940 メートルの最高点まで登ってみた。再び草原の家前まで降り、昼食を食べ始めたころにやっと他のグループも到着し始めた。

昼食後は牧場の中を横切り、途中から東側の林の中を下って水の国へ向かった。途中では、カイズカイブキの双幹の並木、ミズキの横枝からの立枝、ナツツバキの蕾と幹肌、カツラの木などを観察した。水の国では、池のほとりの木にオレンジ色の実がなっており、みんな大騒ぎで観察していたら、正体はマス釣りのウキで、大笑いになった。ここにはミズキの木の枝の出方がとても美しい木があり、車枝の状況や、枝が綺麗な棚になっているところなど、じっくり姿を観察してもらった。

街へ出る手前ではニシキウツギを観察してもらったが、調べたところ葉裏に毛が無いことと、花の萼筒が途中から急に膨らんでいるところなどからハコネウツギだという判断になった。終始他の班に先行して歩いたので、最後もトップで売店前に帰り着いた。（青野　記）

＜3 班＞（担当：杉山、喜多）

３班は、男性２人、女性４人の６人、いずれも植物になかなか詳しい方々である。

ここを訪れて目に入ってくるのはヤマボウシで、開花のピークを迎えている。白い総苞片がよく目立つ。その理由は、役割は、何故平らに開くのか、そんな話から始める。コブシの前で、この花の白さがもたらした、平家の落武者の悲話を紹介しつつ「花の谷」を目指す。

「花の谷」では、サワトラノウを写真に収め、それからハンゲショウが蕾を付けていたので名の由来や別名等説明、カキラン、クサレダマ、ミソハギなど花時期が合わず花が見られないものについては、写真を見せながら説明した。

アオハダが出てきたので、小枝を爪で剥いでもらい名の由来を実感してもらった。アキニレやノリウツギは共に、かつては和紙を漉く時の繊維を絡める繋ぎとして使われたことや、ノリウツギの耐煙性について、ネジキが乾燥地の指標植物であることや利用について解説した。

普段あまり目にしないクマヤナギの果実を目にすることができた。クマヤナギの名の由来や薬効、利用について話す。ヤマウコギにも果実が残っていたので見ていただく。また、オカウコギとの違いを写真を見ながら解説し、葉裏のダニ部屋も確認してもらった。また、葉柄の虫こぶの作成者についても解説する。ナツツバキの前では、茶花として使われることやそれに関連して「利休七選花」について質問するとともにその７種を紹介した。

ウメモドキの雄株、雌株の両株が見られたので、花の違いをルーペを覗いて確認してもらい、雄花か雌花なのか当てていただいた。皆さん正解でした。よく理解できたようだ。ハコネウツギがきれいに咲いていた。ここで、ニシキウツギとの見分け方や両種の中で色変しない種のある事を説明する。

今日、皆さんが「エーッ！」と目を丸くして驚いてくれた植物は、実はニワゼキショウであった。６ 枚の花被片の内、花弁と萼片に当たるものの見分け方について説明したとき「これが今日一番の驚きかも知れない！」と大いに感動してくれ、この予想外の反応に思わずにんまりしてしまった。

これ以後も、庭木の管理などの話をしたり鳥の鳴き声を聞いたり見たりしながら、楽しく観察を続けることができた。満足していただけたのではないだろうか。（杉山　記）

＜4 班＞（担当：佐野、高橋、矢下）

4班は6名の常連の皆さん。全員、富士山こどもの国は初めての方々だった。

まず、花の谷へ向かった。途中の歩道沿いには、イロハモミジ、ホオノキ、ウツギ、マメザクラ、ゴマギがあったので、それぞれの特徴について説明した。特にホオノキについては、花の寿命が3日程で短く、自家受粉を防ぐ仕組みが備わっていることを知ってもらった。開花１日目は雌しべが張り出し雌花となり、2日目は雄しべが張り出し雄花となる。3日目は花弁は反り返り、雄しべは散る。両性花であるが、時期によって「性」が変わることによって自家受粉を防いでいることを写真を使って解説した。皆さん、花の巧みなしくみに驚いていた。

花の谷では「サワトラノオ」をじっくりと観察してもらった。オカトラノオ、ヌマトラノオは観たことがあるが、本種は初めてのようであった。全国的にも自生地が限られ、静岡県での自生地は「浮島ケ原」だけなので、他の種との違いがわかるように写真を使って解説した。また、この花の谷には、氷河期からの遺残植物といわれる3枚の葉を付けたミツガシワもあり、多くの希少種が保護されていることを知ってもらった。盆花として使われるミソハギは大群落を形成していたが、まだ開花していなかった。ハンゲショウがあったので、「ハンゲ」の意味や葉が白化する理由について解説した。

谷の中央付近にあるサンショウバラは見事な数の実を付けていた。「花の時期はすごくきれいだっただろうね。今度、花の時期に来たいね・・・。」と花期に訪れることができなかったことを惜しむ声が聞かれた。これを聞くと、担当幹事として、もう少し早い時期に計画した方がよかったと悔やまれる思いがした。更に、ベニバナヤマシャクヤク、クリンソウも花期を終え、既に実になっていた。1週間前の下見時に開花していたサルナシも実になっていたので、この時期

の植物の生長の速さに驚いた。花の谷では希少な草花を残すために、全て手刈りでススキ等の草を刈っていることを説明すると、管理の大変さに驚いていた。キリンソウ、クサレダマ、シモツケ、ノアザミなどを観ながら草原の家へ向かった。

遊歩道沿いに１本のネジバナが咲いていたので、茎の巻き方には右巻きと左巻きがあることや巧みな受粉の仕組みを備えていることを解説した。自生したヒノキがあったので、苗木を植えて育てたヒノキとは樹形が異なることを知ってもらった。昼食場所の草原の家には 12 時前に到着。既に昼食を摂っている班があったので、我々の班も昼食タイムとした。

午後は水の国を目指して歩道を歩いた。途中、富士山が見えたので富士山の成り立ちについて説明した。ノリウツギ、クマヤナギなどを観察しながら、ヤギ、ヒツジが飼われているまきばに向かった。まきばでは、ヤギの瞳や歯、消化管の特徴について、今日の観察会のおまけとして解説した。

その後、カブトムシの避難小屋を過ぎるとナツツバキ、カツラがあった。カツラの香りだろうか？いい香りがするという方が数名いた。

水の国に入ると、いくつものモリアオガエルの卵塊があった。ボート小屋の横にはテーブルツリーという名に相応しいミズキがあった。葉を観察してもらい、特徴的な葉脈の走行について説明した。白と紅色の花を付けたハコネウツギは見頃を迎えていた。最後に急な階段が待っていた。「この階段を登るとゴールなので頑張ろう！」と勇気づけた。最後のトンネル周辺にはヤマオダマキが沢山咲いていた。石崖のわずかな窪みに生えているものもあり、植物の逞しさに皆で感動した。全員、定刻前に無事ゴール。開花している草花は少なかったが、静かな園内をのんびりと歩きながら植物観察を楽しむことができた。インストラクター３ 人が色々な視点から解説したので、参加者にも満足していただけたと思う。（佐野 記）

スナップ写真で１日を振り返る

入園後は、まずオリエンテーション

ゴマギの葉は、どんな匂いがするかな？

花の谷で何か見つけたようだ・・・

花の谷の木道の脇には何があるかな？

草原の家の前のテーブルで昼食タイム

水の国へ向かって観察会を再開

これがクマヤナギだよ

トンネルを抜けるとゴールだ！

出会えた植物たち

サワトラノオ

クマヤナギの実

ウメモドキ

シモツケ

ヤマオダマキ

ベニバナヤマシャクヤクの実

ハコネウツギ

以上（報告まとめ　佐野）